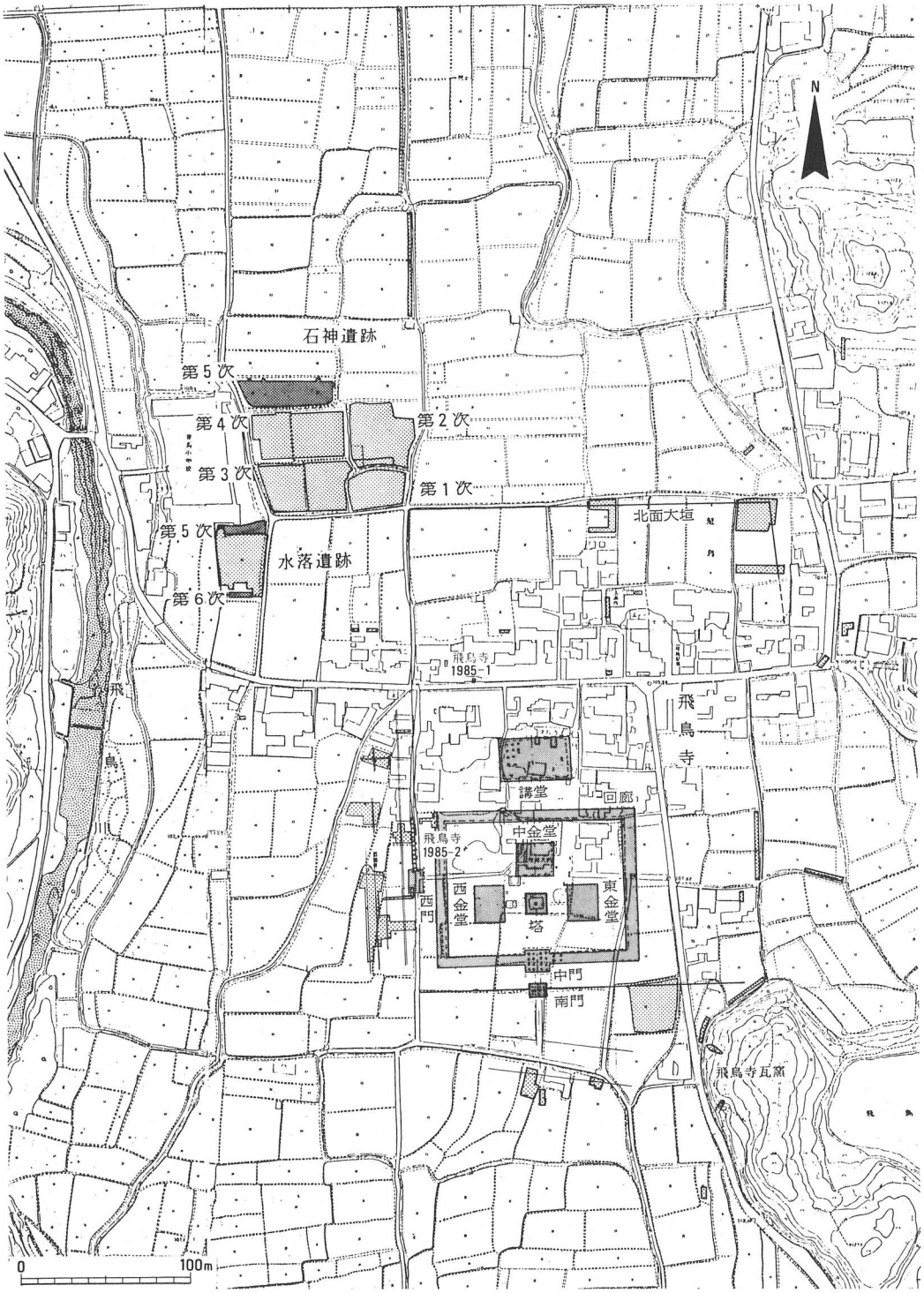
II　飛鳥地域の調査



第20図　石神遺跡・水落遺跡・飛鳥寺周辺調査位置図（1：4000）

1. 石神遺跡第5次調査

（1985年7月～1986年2月）

日本最古の寺，飛鳥寺の旧寺域の西北に接し，また，「漏刻」の史跡水落遺跡の東北に接する石神遺跡は，「須弥山石」「石人像」の出土地として知られている。石神遺跡はこれらの石造物および石組溝・石敷の存在から斉明紀に認められる外国使節や蝦夷などに対する饗宴の場の庭園施設と考えられていた。また文献考証からは，石神遺跡を含めた飛鳥寺の北側の地域は，天武朝の飛鳥浄御原宮と推定されていた。このように石神遺跡周辺は7世紀中頃以降，重要な地域であったと考えられていたのである。

この地域の性格を明確にするために，1981年以来，石造物の出土地，およびその周辺の水田の発掘調査を継続的に行なってきた。その結果，7世紀中頃（斉明朝）の建物・塀・石敷・石組溝・井戸を中心とする遺構と，これらの遺構を廃棄し，大規模な造成工事を伴った7世紀後半（天武朝）の建物・塀・石敷を中心とする遺構，さらに7世紀末～8世紀初頭（藤原宮直前・藤原宮期）の遺構の存在を確認することができた。斉明朝と天武朝とでは遺構の配置の相違などからみて，遺跡の性格は一変したものと考えられるが，両時期ともに，ほぼ同じ位置の東西塀によって南側の水落遺跡・飛鳥寺と区画されていたことが明らかとなってきている。

第5次調査は第4次調査地の北に接した水田で実施し，調査面積は約960㎡で5次までの調査総面積は約5,900㎡となった。本調査地は第4次調査地と比較すると水田面で約0.5m低く，前調査地で認められた遺物包含層の大半は削平されており，遺構検出面は自然地形の高い東では地表下0.3m，西では0.6mの深さであった。遺構検出面は削平を被っていない所では黒褐色の粘質土，もしくは砂質土の整地土である。

遺構

検出した遺構は縄文時代から中世にかけてのものであるが，これらの中で主要な遺構は7世紀中頃から8世紀初頭のものであり，大きく4時期（A期・斉

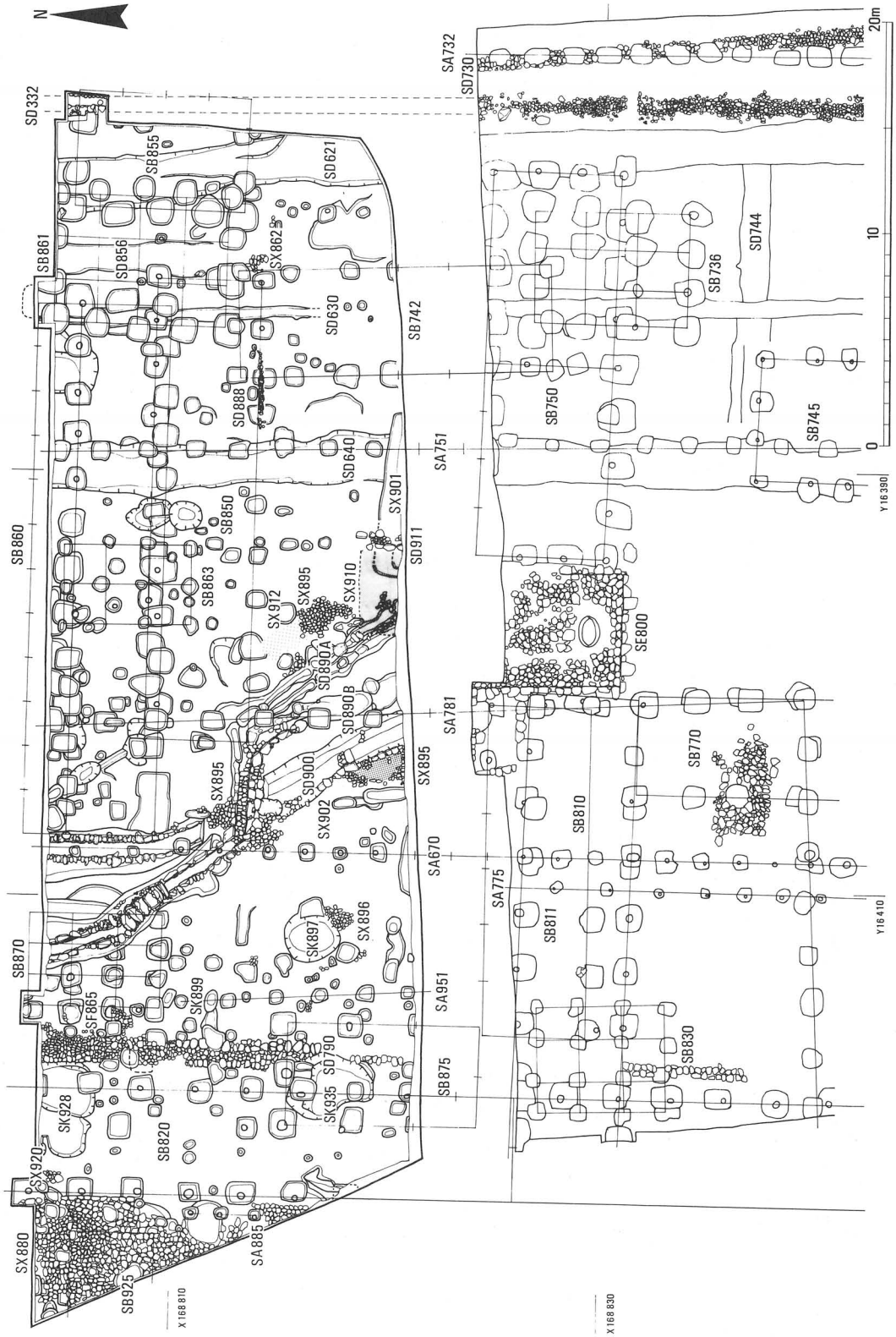
明朝，B期・天武朝，C期・7世紀末，D期・藤原宮期）に分けることができる。

A期　この時期の遺構は第4次調査区北側中央で検出した側石・石敷を伴う特異な構造の井戸SE800を中心に変遷し，掘立柱建物5棟以上，石組溝（一部は暗渠）4条，石敷などを検出した。A期の遺構は重複関係からさらに2期に分けられる。

A－1期には調査区東端の石組溝SD332，井戸SE800の北にある建物SB850，井戸から西北に流れ出る石組溝SD900，調査区西端の石敷SX920などがある。東西棟建物SB850は桁行10間（21.6m）・梁行2間（4.8m）の規模である。石組溝SD332は第3次調査区から続く南北溝で，総延長約70mを確認し，さらに北へと流れていく。本調査地では著しく削平を受けており，また東の側石の位置には吉野川分水が流れているため，西の側石の底部と底石の一部を検出したにとどまった。井戸の排水路をかねる石組溝SD900は幅0.6m，深さ0.7mの規模で全長27mを確認した。SD900はSB850の西側付近からは暗渠になっていたものと考えられる。溝の底石は開渠部分で一部検出しただけである。また，SD900の開渠部分の周辺は溝へとむかってゆるやかに傾斜する石敷SX895Aでおおわれていたものと想定できる。石敷SX920は数石しか確認できなかったが，後の石敷SX880より約0.5m低い位置にある。柱穴の存在から建物SB850以外にも他の建物が存在したようであるが，整地土・上層の石敷等を完全に除去しなければ全貌を明らかにできないため，検出をさしひかえた。

A－2期には，調査区西端に南北方向の長廊状建物SB820が建ち，その東側に建物が並ぶというかなり大きな改修があり，遺跡の西方の一画が一変する。建替えなどから2小期にわけられる。

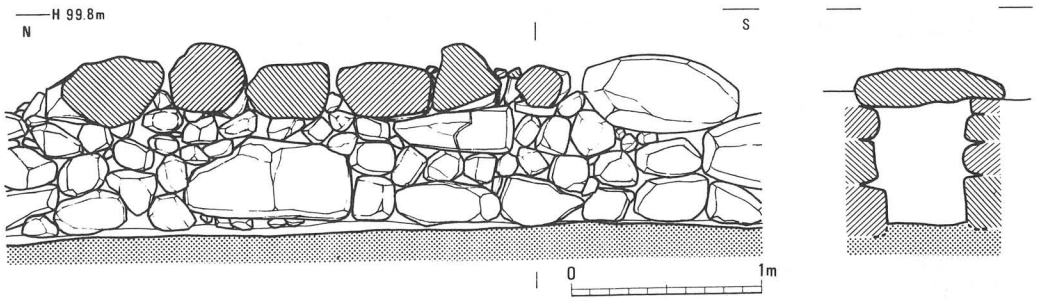
A－2-1期にはSB820の東に，建物SB855・860・870の3棟が東西に並び，ほぼ柱筋をそろえて建てられる。井戸から北方へと流れる溝はこの時期には存在しない。建物SB861は桁行4間（8m）・梁行3間（推定5.5m）の南北棟である。建物SB860は桁行12間（24.8m）・梁行3間（6m）の北



第21図　石神遺跡第５次調査遺構配置図（１：300）

庇をもつ東西棟建物で，西側柱筋はA－1期の石組溝ＳＤ900の暗渠部分の蓋石をはずし，埋めたて，東の側石をこわして柱を建てている。建物ＳＢ870は桁行３間（６ｍ）・梁行３間（4.5m）の総柱の南北棟建物で，東側柱筋は布掘りとなっている。長廊状の南北棟である建物ＳＢ820は梁行２間（4.9m），桁行は第４次調査とあわせて15間（37.2m）を確認した。ＳＢ820は柱間などからみると，この一画の南を限る東西塀ＳＡ600にとりつく可能性もある。ＳＢ820の東側にはゆるい傾斜をもつ石組の雨落溝ＳＤ790があり，西側には柱に接して東側に見切をもつ石敷ＳＸ880が西へと広がっている。ＳＢ820は立柱後に整地が行なわれており，整地土が残存している所では掘形は認められずに柱痕跡しか認められない。この整地土のうえをＳＸ880の裏込めの黄色粘土がおおう。ＳＡ885は２間（３ｍ）の南北塀で，その掘形は黄色粘土におおわれている。構築の手順としては，ＳＢ820立柱→整地→ＳＡ885立柱→黄色粘土裏込め→ＳＸ880となる。しかし，柱位置などからみると，ＳＡ885はＳＢ820にかかわる足場穴の可能性が高い。調査地西北30ｍには「浄御原宮推定地」とする石敷が露出保存されているが，ＳＸ880の位置・標高からみると，この石敷と一連のものと考えられる。調査区東端の石組溝ＳＤ332は建物ＳＢ855の柱穴と重複し，建物より古いことから，この時期にＳＤ332は廃され，東のＳＤ730が新たに設けられたものと考えられる。

A－2-2期には一部の改修が行なわれる。総柱建物ＳＢ870は廃され，その位置に井戸から西北に流れる石組溝ＳＤ890が新たに掘られる。ＳＤ890は西方向から西北方向に流路を変える位置から北は暗渠であったと考えられる。



第22図　ＳＤ890暗渠部分断面図（１：40）

溝の規模は開渠部分で幅0.4m・深さ0.4m，暗渠部分で深さ0.6mで開渠の部分には底石が敷かれている。井戸から流れ出る部分，約16mには改修が認められ，東の溝が古く，西の溝が新しい。東西石組溝ＳＤ888は底石だけ残存し，幅0.3mで４ｍ検出しただけだが，ＳＤ732から水を引きＳＤ890の西流する部分に合流したものと想定できる。井戸から暗渠に至るまでのＳＤ890の両側は溝へむかってゆるやかに傾斜する石敷ＳＸ895Ｂ・Ｃでおおわれている。石敷ＳＸ895はＡ－１期からかぞえて３度の改修を受けている。またＳＢ820とＳＢ860との間は暗渠上を石敷ＳＦ865が通路として敷設され，この位置では雨落溝ＳＤ790も小ぶりな石に改められている。

Ｂ期　Ａ期の遺構が廃され大改造が行なわれる。この時期の遺構には掘立柱建物ＳＢ861・875，掘立柱塀ＳＡ670，石敷ＳＸ862がある。建物ＳＢ861は桁行４間（８ｍ）・梁行３間（６ｍ）の南北棟建物で一部に床束がみとめられる。ＳＢ861の周囲は南側に残る石敷ＳＸ862からみて，幅約２ｍにわたって玉石が敷かれていたものと考えられる。建物ＳＢ875は桁行３間（９ｍ）・梁行２間（4.8m）の南北棟である。南北塀ＳＡ670は第３次調査区から続き36間（63m）分を検出しており，この地域を東と西に区画する塀であろう。

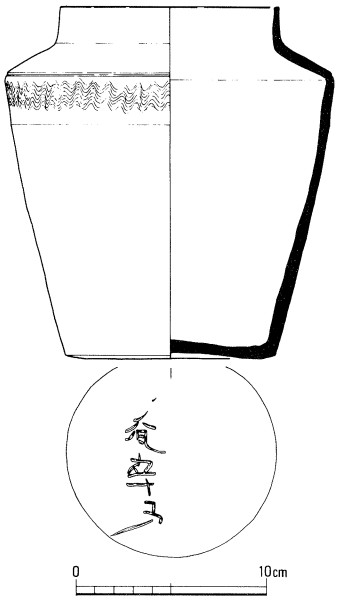
Ｃ期　この時期の遺構には掘立柱建物ＳＢ742・863・925，掘立柱塀ＳＡ751，素掘溝ＳＤ640，方形石組ＳＸ910，石敷ＳＸ896，バラス敷ＳＸ912などがある。建物ＳＢ742は第４次調査区から続く南北棟建物で，桁行６間（14.4m）・梁行２間（4.8m）の規模である。建物ＳＢ863は桁行３間（６ｍ）・梁行２間（４ｍ）の総柱の南北棟である。建物ＳＢ925は桁行２間以上（柱間２ｍ）・梁行２間（４ｍ）の東西棟建物で，Ａ期の石敷ＳＸ880を厚さ10cmのバラスで埋めた後に建てられている。塀ＳＡ751は素掘溝ＳＤ640の東肩にたてられた柱間2.1mの南北塀で，総延長48mを検出した。方形石組ＳＸ910は人頭大の玉石で周囲をかこみ，その内側には拳大のバラスを敷きつめ，東側には石組溝が存在し，東西約４ｍの規模である。ＳＸ910の周辺は石敷ＳＸ896・バラス敷ＳＸ912で舗装されていたと考えられるが，石敷・バラス敷ともごく一部を残すだけである。

D期　この時期の遺構には，掘立柱塀ＳＡ781・951，素掘溝ＳＤ621がある。塀ＳＡ781は柱間2.5mの南北塀で，第４次調査区から続き，総延長35mを検出した。塀ＳＡ951は柱間2.1mで，５間以上の南北塀である。

遺物

本調査地からも第３・４次調査同様に，大量の土器・金属製品，および瓦・石製品が出土している。

土器はＢ～Ｄ期にかけての整地土・土坑などから出土した土師器・須恵器が大半であるが，他に縄文土器，弥生土器，古墳時代の土師器・須恵器などがある。土製品には円面硯，土馬，ルツボ，土玉などの他，Ｃ期の溝ＳＤ640から「瓮五十戸」のヘラ書き銘をもつ須恵器壷が出土しており，注目される（第23図）。この須恵器は大阪南部のいわゆる「陶邑」の製品ではなく，土器そのものからでは今のところ決定的な年代を知ることができない。「瓮五十戸」の「五十戸」は「里」の意味で，「ほとぎのさと」と読むことができ，木簡などにみとめられる「五十戸」の例を増したことになる。だが『倭名類聚鈔』に該当する郷名はみとめられず，具体的な地名を示すか否かは不明である。もし，固有名詞でないとすれば，「須恵器製作者の里」を意味するのであろうか。



第23図　ヘラ書き土器（１：４）

金属製品は主として，焼土・炭化物を多量に含む包含層から出土しており，その大多数は鉄製品で，鏃・釘・鋏（かすがい）・鎌・鉈（やりがんな）・刀子・紡錘車・鍔（つば）などがある。また，青銅製の香炉の蓋も出土している。

瓦は丸・平瓦ともに前回までの調査に比して出土量は少ない。軒瓦は７世紀初頭の飛鳥寺所用の軒丸瓦と７世紀後半の川原寺所用の軒丸瓦が１点ずつ出土している。

石製品では砥石，古墳時代の滑石製有孔円盤，弥生時代の石庖丁・石鏃，縄文時代の遺物包含層などから石鏃・磨製石斧も出土している。

まとめ

今回検出した7世紀中頃から8世紀初頭の遺構は大きく4時期にわけられるが，ここでは過去の4次にわたる調査も含めて，調査結果をまとめておこう。

A期は斉明朝にあたり，この時期の遺構は饗宴に関わる施設と推定しているが，今回の調査によって第4次調査で検出した大規模な井戸ＳＥ800を中心に，建物の建替えや石組溝のつけ替えなど，短期間に3回の改造が行なわれていることが判明した。このような複雑な遺構の変遷は，A期の遺構の性格を考えるうえでも，また，「興事を好」んだ斉明朝を考えるうえでも重要な資料となろう。ＳＥ800からの水は，当初は石組溝ＳＤ900で，次いでは石組溝ＳＤ890によって，曲折しながら北方へと導かれ，さらに調査地の北側へと暗渠を通って流れていく。A－2－1期ではＳＥ800から北方への水の供給はたたれるが，石組溝ＳＤ730など，別ルートによる水の供給が行なわれたものであろう。このように，南の水落遺跡との間を大規模な東西塀ＳＡ600で区画した饗宴空間はさらに北方へと広がり，南北70m以上の規模であることが確認できた。また，石組溝ＳＤ790から西は，地山の標高が，西の飛鳥川にむかって急激に下がっていくことを確認することができた。A－1期の石敷ＳＸ920は地山上に厚さ0.5～0.6mの整地を行なった後に敷設され，A－2期の石敷ＳＸ880はＳＸ920の上にさらに0.3～0.4mの整地を行なってから敷設され，調査区西側ではあわせて約1mの盛土整地が行なわれている。また，今調査区東側でも，石組溝ＳＤ332の底石や掘立柱建物の掘形底面の標高からみると，当初の生活面は抜き取られた石組溝側石分の高さだけ高く，0.5～0.6mの盛土整地が行なわれていたことが想定できる。このように，A期の造成および改造にあたって大規模な盛土整地が行なわれたことが確認でき，この時期の造営がはなはだ大規模なものであったことが想定できる。

B期は天武朝にあたる。A期の遺構は廃棄され，石敷・石組溝の石のかなりの部分がこの時期の改造にあたって抜き取られている。本調査地東側では建物ＳＢ861の周囲の石敷ＳＸ862がB期の生活面を示すことから，最大0.5mの切土が行なわれたと考えられる。第2次・第3次調査でみとめられる盛土整地と

もども，この区画内の大造成工事が行なわれた時期である。建物配置も東西棟を中心とするＡ期と比べると，南北棟が多い。とくに第４次調査で検出した２棟の３×３間の総柱の南北棟ＳＢ735・736と，今回検出した４×３間のＳＢ861の３棟は規模もほぼ一致し，柱筋もほぼ揃えた整然とした配置をとって南北に並んでいる。この時期の性格はＡ期の饗宴施設的な性格とは異なったものが考えられる。また，南北塀ＳＡ670によってこの区画は東西に分割され，それぞれの区画が異なった性格をもって使用されていたものと考えられる。南の東西塀ＳＡ560で，水落遺跡・飛鳥寺と区画された空間はさらに北へ広がり，Ａ期同様南北70ｍ以上の規模であることが確認できた。

Ｃ・Ｄ期は藤原宮の直前，および藤原宮の時期にあたる。Ｃ期の造営方位はほぼ真北に近く，Ｄ期は北で西に振れている。遺構の性格付けなどについては今後の調査の進展にまちたいが，７世紀末から８世紀初頭にかけてまで，この地域が区画されて盛んに利用され続けていたことが判明したことの意義は大きいものであろう。

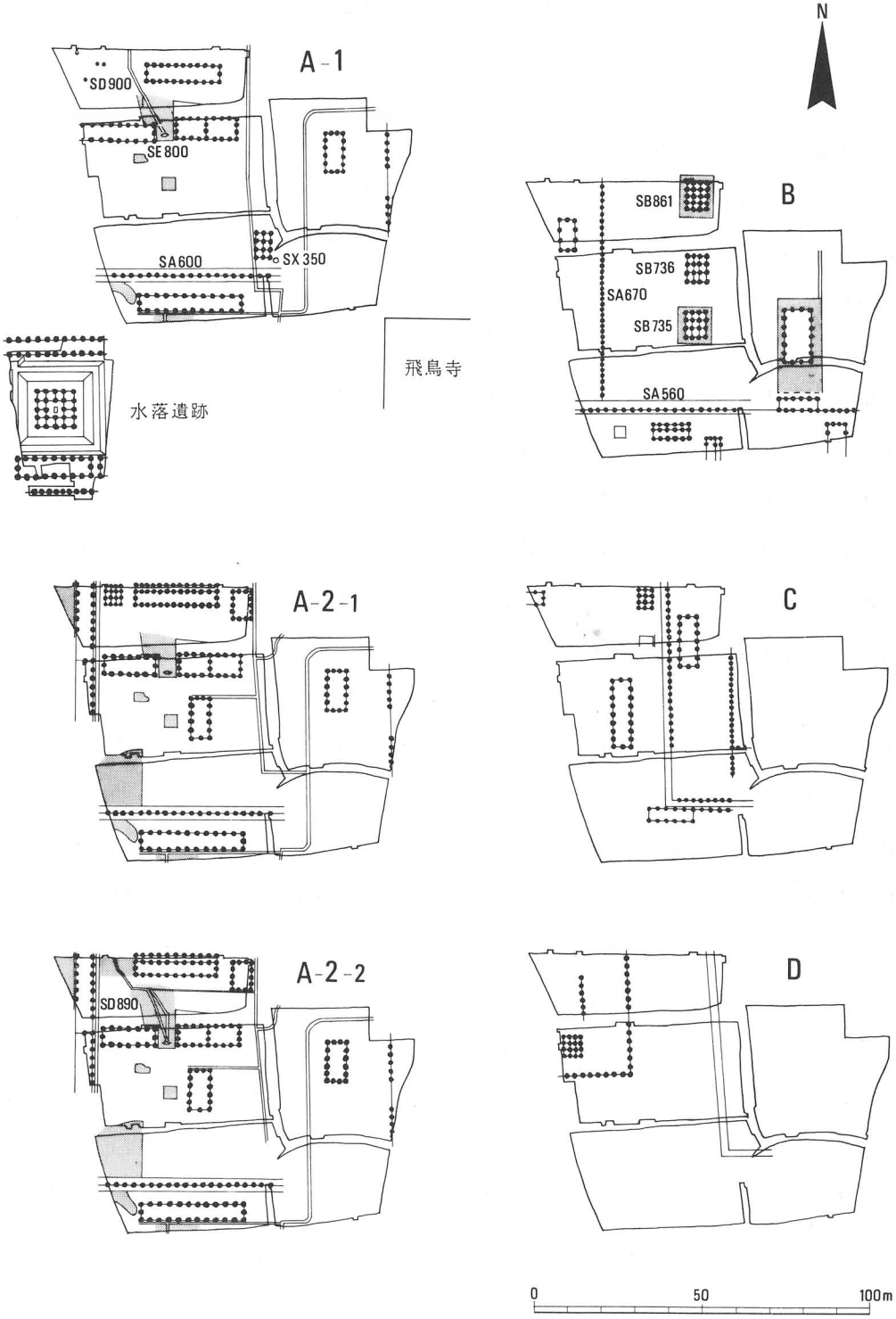
５次にわたる石神遺跡の調査で判明したことを簡単にまとめてみると次のようになる。

① 斉明朝において大規模な盛土を伴う造成工事および改造工事が行なわれ，井戸ＳＥ800を中心としためまぐるしい遺構の変遷がなされたこと。

② 天武朝においても，盛土・切土を伴う大規模な造営工事が行なわれ，整然とした配置をもつ建物群が建てられ，前代とは性格を一変しつつも，重要な地域として引き続き使用されていたこと。

③ 藤原宮の時期に至っても，塀による区画を伴って，この地域が引き続き使用されていたこと。

以上のように，石神遺跡の性格を明らかにするうえで重要な知見を得ることができたのであるが，各時期における遺構の範囲の確定までにはいたっていない。また，各時期の遺構の具体的な性格の確定も今後の周辺地域の調査の進展にゆだねなければならない。



第24図　石神遺跡主要遺構変遷図（1：2000）

2. 水落遺跡第5次調査

（1985年2月～4月）

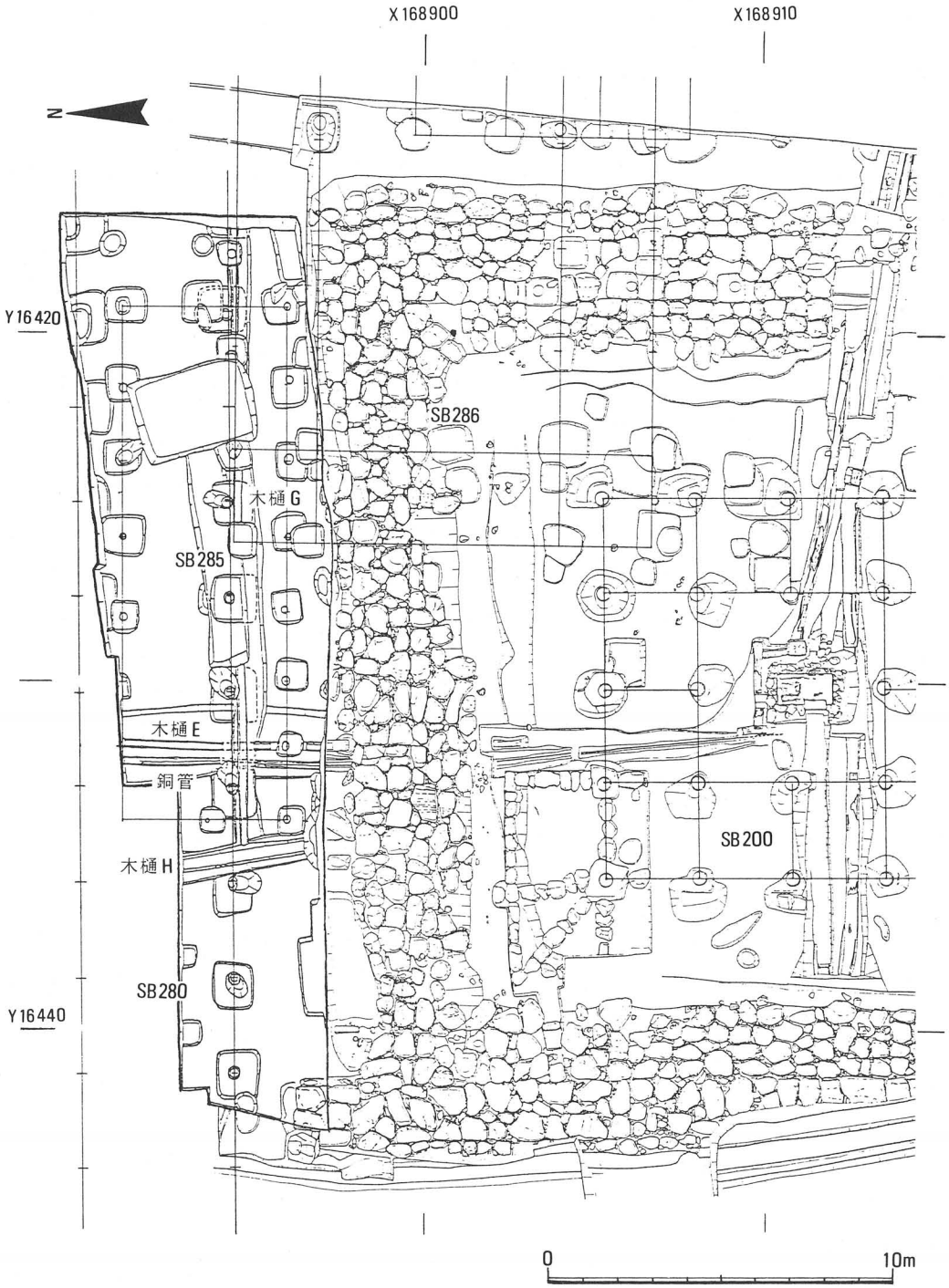
この調査は，史跡整備の資料を得る目的で実施した。調査地は，水時計建物の北辺基壇建物化粧石の北側で，昨年まで旧飛鳥小学校の校舎があった所である。調査は，東西約26m，南北7～5mの調査区を一部旧調査地区に重複させて設定し，掘立柱建物の存否を確認するとともに，銅管・木樋の延長部分を検出することに主眼をおいて進めた。

調査の結果，掘立柱建物3棟，銅管，木樋3条などを検出した。それらは，A・Bの2時期に大別され，B期はさらに重複関係から2期に細分される。

A期の遺構　掘立柱建物SB280のほか，銅管，木樋E・G・Hがある。これらは，水時計の礎石建物SB200と一連の遺構で，7世紀中葉に属する。

掘立柱建物SB280は，桁行9間以上（24.3m），梁行2間（4.2m）の長大な東西棟建物で，その南側柱列と北側柱列の一部とを検出したが，調査区内では東西とも妻柱は検出されなかった。柱間寸法は東西約2.74m等間で，柱筋ともども，礎石建物SB200および南の掘立柱建物SB180と一致する。南の遺構群と一連の掘込地業中に方1.4mの掘形を掘って立てた直径38cmの柱をすべて抜き取っている。このことから，このSB280が南のA期の遺構群と一体で造営され，また廃絶されたことは明らかである。なお，SB280の南側柱列はSB200の北側柱列の北約11.2mにあるが，SB280の北側柱列と南のSB180の南側柱列とはSB200の中心からの距離がおのおの約20.7mで等しい。

銅管・木樋Eは，前回調査の北延長部を約6.5m分検出した。木樋Eは水時計へ汲みあげた残りの水を北方へ排水する地下水路で，外寸法で幅30cmの規模をもつ。遺存する底材の上には砂が堆積していた。銅管は木樋Eと併走するが，SB200の基壇上から延びる別系統の地下水路で，内径9mmの管を漆でくるみ，それを約10cm角の木製の樋に封じ込めて保護する入念な被覆構造をもつ。銅管はSB280の建物中程で二又に分かれ，一方はなお北へ延びて調査区外へ至る。いま一方は，上方へ約70°の角度で立ち上がり，SB280の建物内で地上へ出



第25図　水落遺跡第５次調査遺構配置図（１：200）

ることになる。後者は，長さ約30cmで折れているが，他と同様の被覆がなされている。なお，前回調査で検出した銅管の南端からこの分岐点までは水平距離で約18.2mあり，彼我の比高は約80cmである。

今回新たに検出した木樋Gは，ＳＢ280の南縁に沿って東から西へと埋設された地下水路である。木樋は完全に腐朽し，粘土と化していたが，木樋Ｅと同規模で約17.8m分を検出した。木樋Gは，先述の銅管・木樋Ｅの上を立体交差で渡り，南北木樋Hに接続されている。木樋Hは外寸法で幅約50cmと一回り大きい地下水路である。その上半部で木樋Gを受けて，やや斜めの北方へ延びており，約６m分を検出した。木樋Hの南端は木樋Gとの接続部の南約1.8mにあって，北辺の化粧石の背面に接している。

Ｂ期の遺構　　掘立柱建物ＳＢ285・286などがある。重複関係から１・２に細分されるが，いずれもＡ期の遺構の廃絶後に大規模な整地をして営まれた７世紀後半代の遺構である。

Ｂ―１期の掘立柱建物ＳＢ285は，桁行７間（14.8m），梁行２間（4.9m）の東西棟建物で，方1.1mの掘形に直径20cm余りの柱をたてている。

Ｂ―２期のＳＢ286は，桁行４間以上，梁行４間で四面庇付の東西棟とみられる。身舎桁行3.0m等間，梁行3.6m等間，庇は桁行2.4m，梁行2.7mに復原できる。Ｂ期の遺構には，他にいくつかの柱穴があるが，建物などにまとめえない。

Ａ期の遺構では，水時計の建物の北にも長大な東西棟建物が存在することが判明した。しかも銅管などの地下水路は建物の北方へと導かれており，遺跡の北方には特殊な水利用の施設の存在が想定される。また，建物内で地上に出る銅管の存在は，この建物が単なる付属屋ではないことを示している。さらに，新たに検出した木樋Ｇ・Ｈは７世紀中葉の飛鳥の水路網がなお複雑に張り巡らされていることを推測させる。

Ｂ期の遺構は，７世紀後半に度重なる土地利用の大改造の行なわれたことを物語っており，それらは隣接する石神遺跡の遺構群は勿論のこと，飛鳥地域の都城全体の構成の中で理解されるべき内容を含んでいる。

3. 豊浦寺第3次調査

（1985年2月～5月）

この調査は向原寺庫裡の改築工事に先立って実施したものである。調査地は豊浦宮推定地及び豊浦寺旧境内にあたり，周辺地域についてはこれまでに数次にわたる調査が行なわれている。1957年の奈良県教育委員会による調査では，向原寺境内（A区）で5×4間に復原できる中世の礎石建物，その南接地（B区）で雨落溝を伴う二重基壇建物の北縁を，字金堂にある塔心礎周辺（C区）では周囲に石敷をめぐらした塔跡が検出されている（第26図）。1970年には奈良国立文化財研究所が向原寺本堂の北50mの地点を調査し，北で西に約17°振れる南北方向の石列SX165などを検出している（第1次調査，学報XXⅦ）。その後，民家の改築などに伴なって小規模な調査を数回行なっているが，さしたる成果は得ていない。1980年には向原寺境内の薬師堂の解体移築工事に伴う調査を行ない，境内の礎石建物が鎌倉時代初頭再建の床張りの仏堂であるこ

第26図　豊浦寺調査位置図（1：2000）

とを確認し，室町時代後半に焼失したことも判明した。さらにその下層には前身建物の基壇と思われる版築層が存在することも明らかになるなどの成果を得ている（第２次調査，概報11）。

今回の調査は以上の成果に基づき，再建仏堂の西南隅の確認と，前身建物の規模や年代，さらには豊浦寺創建以前に遡る下層遺構の有無などを明らかにする目的で行なった。調査は東西22.5m，南北7.7mの発掘区を設けて実施した。その結果，１．庫裡建設前の近世の遺構　２．鎌倉時代再建の仏堂に関連する遺構　３．豊浦寺創建期の礎石建物とそれに関連する遺構　４．豊浦寺創建前の遺構など，主として４時期にわたる遺構を層位的に検出した。

遺構

１．庫裡建設前の近世の遺構

調査区の上層は明治38年以前の庫裡建設とその後の著しい撹乱を受けている。この撹乱層を除去して近世の境内面を検出した。この旧境内面からは，東西方向にのびる石敷参道１，部分的に遺存する石敷２，炉穴７，石組井戸１，南北方向の石組溝を伴う石組の池１，再建仏堂の礎石落し込み穴１，再建仏堂及び創建建物の礎石や基壇の石材を焼却破砕した溝状に連なる土坑群などを検出した。これらの遺構には近世陶磁器片，及び桟瓦片が含まれている。

２．鎌倉時代再建の仏堂に関連する遺構

近世の遺構を除去し，調査区の北半では黄褐色山土を主体とする基壇土を，南半では13～14世紀の土器を含む暗褐色土を検出した。北半で検出した基壇土は前身建物ＳＢ400の基壇と考えられ，再建仏堂ＳＢ480に伴う基壇は削平を受け，すでにその礎石位置を示す遺構はすべて破壊されていることが判明した。ただし，近世の礎石落し込み穴中の自然石礎石ＳＸ408があまり旧位置を動いていないとすれば，この礎石はＳＢ480の西南隅礎石であった可能性も考えられる。

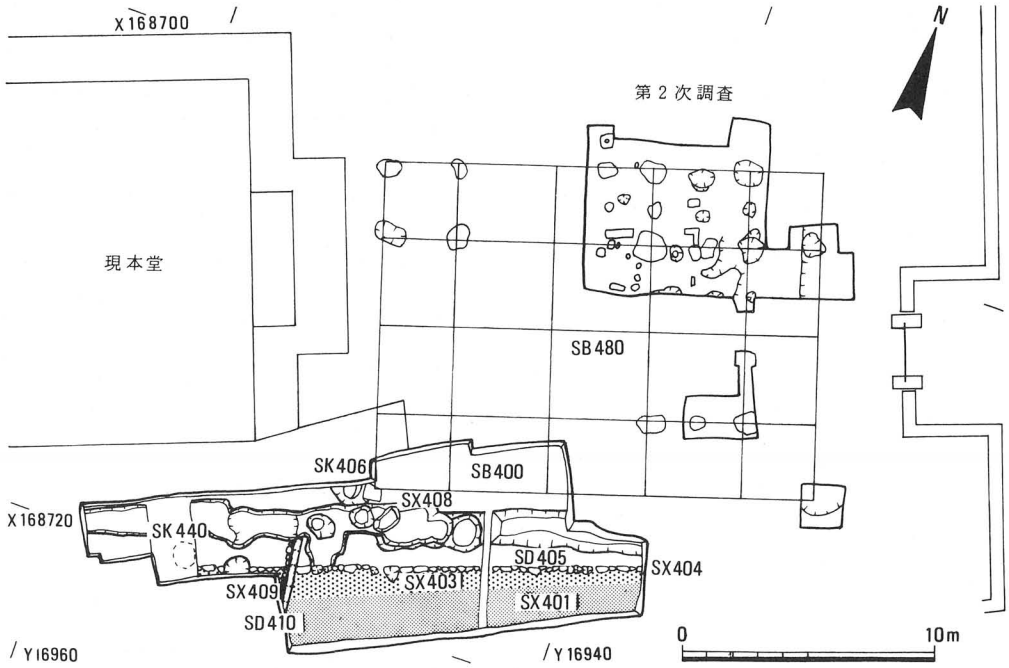
この他に暗褐色土層中で検出した南北方向の石列ＳＸ409がある。ＳＸ409は東側を見切りとして揃え，浅い素掘溝ＳＤ410を伴っており，室町時代の丸・平瓦片を含む焼土層が堆積していた。このＳＸ409は，ＳＢ480とは別の建物

が西側に存在していて，ＳＢ480とともに焼失した痕跡かと考えられたが，遺構が寸断されておりそれ以上の知見は得られなかった。なお，ＳＸ409の方位は北で西へ約15°振れており，北で西へ約18°振れるＳＢ480の方位とは若干異なる。

３．豊浦寺創建期の礎石建物とそれに関連する遺構

調査区南半の基本的層序は，暗褐色土層の下に７世紀前半の軒丸瓦や丸・平瓦の大形破片を多量に含む暗茶褐色土があり，さらに平安時代の土師器・瓦器小片を多量に含む褐色土，旧境内面を形成するバラス敷，石敷，創建時の整地土層の順となる。これらを層位的に発掘して，豊浦寺の創建期に遡る礎石建物ＳＢ400と，雨落溝ＳＤ405，雨落溝の南を画する石列ＳＸ404，石敷ＳＸ403，バラス敷ＳＸ401，礎石落し込み穴ＳＫ406などを検出した。

礎石建物ＳＢ400は調査区全域でその南辺を確認し，東西の長さが22ｍ以上の規模を持つことが明らかになった。建物の方位は北で西へ約19°振れている。基壇の築成は後述する下層掘立柱建物の廃絶後の自然堆積層上に，一旦，厚さ約0.2ｍの整地を基壇外まで行ない，その上に直接版築しており，掘り込み地



第27図　豊浦寺第３次調査上層遺構配置図（１：300）

業は認められない。版築は主として黄褐色ないしは青灰色山土を平均約５cmの厚さで12層以上積み上げたもので，最も遺存状態の良い所で厚さ0.7mを測る。基壇上面は著しい削平を受けており，礎石落し込み穴ＳＫ406と礎石１個を検出したにとどまる。礎石は花崗岩製で，直径0.6mの低い円形造り出しを有し，創建時のものと考えられる。基壇化粧は再建時及び近世に抜き取られ，全く遺存していない。しかし，雨落溝南側を画する石列ＳＸ404に凝灰岩切石を転用した所が３か所あり，この他にも上層で検出した土坑から凝灰岩片が投棄された状態でいくつか見つかっているので，当初は凝灰岩切石を用いた基壇と考えられる。これらの凝灰岩片の中には厚さ14cmの羽目石，基壇隅に用いた地覆石と思われるものがある。なお，階段の痕跡は調査区内では見いだせなかった。雨落溝ＳＤ405は，その南側を石列ＳＸ404で画し，拳大の礫を厚さ0.2m程敷きつめている。北側は基壇化粧を抜き取る際に壊されているが，最も遺存状態の良い所では幅約1.3mを測る。石列ＳＸ404はひと抱え程から人頭大の玉石を主として用い，北側を見切りとして揃え，抜き取られた部分を含め全長17.5m分を検出した。ＳＤ405とＳＸ404は一部に凝灰岩切石を転用していることから創建当初のものとは考えられず，雨落溝下層から出土した奈良時代前半の土器から考えると，奈良時代以降に付設されたもので，当初は特に雨落溝を設けなかったと推定できる。雨落溝の南側には人頭大の玉石を敷く石敷ＳＸ403が幅0.6mにわたって部分的に残る。しかし，その上面は必ずしも平面をなさない点が注目される。ＳＸ403の南側には北側を見切りとする玉石を一列並べ，その南側に拳大の礫を敷く石敷ＳＸ401があり，奈良時代以降の旧境内面を形成していたと考えられるが，後世に撹乱を受けて全域には遺存していない。さらにＳＸ401・403の全域を覆うバラス敷ＳＸ426が設けられ，境内面のかさ上げが行なわれる。その年代は出土した土器から10世紀前半のことと考えられる。ＳＸ426上に堆積する暗茶褐色土層からは，７世紀前半の軒丸瓦や丸・平瓦の大形破片がまとまって出土しており，ＳＢ400の焼失ないしは倒壊に伴う堆積と考えられた。

この他の遺構としては，調査区西端近くで検出した土坑ＳＫ440がある。Ｓ

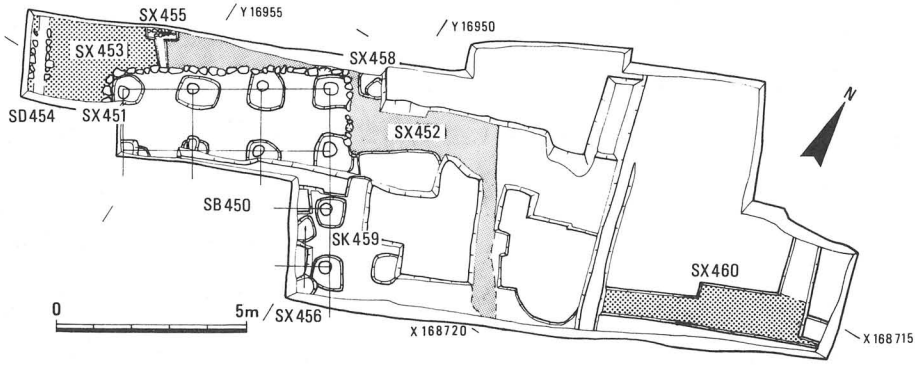
K440は基壇築成に先立つ整地土上面から掘り込まれ，さらに基壇築成と一体と思われる整地土層によって覆われており，その掘削時期を限定できるが，埋土中に飛鳥寺と同笵の軒丸瓦の瓦当破片を多数含む点が注目される。

4．豊浦寺創建前の遺構

ＳＢ400の基壇及びその南にひろがる整地層の下層から石敷をめぐらす掘立柱建物ＳＢ450と石敷ＳＸ460，あるいはそれに相前後する時期の柱穴や土坑を検出した。

ＳＢ450は，桁行３間（4.68m）以上，梁行３間（5.49m）の高床式の南北棟建物と考えられる。柱はすべて抜き取られているが，柱痕跡下半が明瞭に残っており，柱の直径は約30cmに復原できる。柱間寸法は若干のばらつきがあり，柱筋も不揃いであるが，現状では桁行1.56m等間，梁行1.83m等間に割りつけられる。建物方位は北で西へ30°前後振れている。

ＳＢ450の造営から廃絶に至る経過は次のように復原できる。まず，古墳時代（５～６世紀）の土器を含む黒色土層上面に一部薄い整地土を置く。柱掘形はこの上から掘り込み，一辺が0.8～1.1m程の不整方形を呈する。この掘形に柱をたてるが，一部の柱穴では柱のまわりに礫をつめて根固めとしていることが確認できた。柱をたてた後，厚さ0.1m程の盛土を置き整地するが，この段階で北側柱筋から約1.4mの位置に拳大の玉石をならべる石敷ＳＸ455を設ける。ＳＸ455の位置は，ＳＢ450の妻側の軒の出を示すものと考えられる。この上に西側の丘陵からの流入土（暗褐色土）が堆積し，ＳＸ455は比較的短



第28図　豊浦寺第３次調査下層遺構配置図（１：200）

期間のうちに埋没したらしい。その段階で再び盛土して建物の内外を整地し，それぞれの柱筋から0.3～0.4m外側に人頭大の玉石をならべた石列ＳＸ451をめぐらし，西半は人頭大の玉石を用いる石敷ＳＸ453，東半はバラス敷ＳＸ452を建物周囲に敷きつめる。西側柱筋から2.1mの所に雨落溝と思われる幅0.25mの石組溝ＳＤ454があり，軒の出を示していると考えられる。東側のバラス敷ＳＸ452はＳＸ451から約４ｍ幅で建物をとりまいていることを確認しているが，北側への範囲は調査区外にあるため不明である。この段階で建物の床下部分にも低い基壇状をなす盛土が行なわれ，この上に拳大の玉石を敷く石敷ＳＸ449が設けられる。建物周囲の石敷上には再び流入土が堆積したため，ＳＸ453の玉石を一部抜き取り，盛土してかさ上げし，バラス敷を全体に重ねている。廃絶にあたっては，床下の石敷ＳＸ449を壊して柱抜取穴を掘る。抜取穴は上部のみ漏斗状に掘り，下半には及ばない特徴がある。なお，数回の盛土を経た最終段階での柱の埋め込みの深さは約0.6mである。廃絶後の状況は，西側丘陵からの自然堆積層が西に厚く，東へいくに従い薄く調査区全域を覆ったものと考えられる。この土層中には瓦片を一点も含まず，６世紀末から７世紀初頭にかけての飛鳥Ｉ段階に属する土師器・須恵器の小片が少量出土しており，ＳＢ450の存続年代の下限を示すものとして注目される。

ＳＢ450の東側には，拳大から人頭大の玉石を敷くＳＸ460がある。調査は上層遺構を損なわないように行ない，また各時期の土坑などによって寸断されているので，必ずしも全貌を把握できなかったが，ＳＢ450東側のバラス敷ＳＸ452の東に少なくとも６ｍ幅で存在したことが窺われる。ＳＸ452の東側には数m石敷を欠く部分があったと見られ，ＳＸ460とは直接つながらないようであるが，この部分は特に撹乱が著しく施行順序の前後などは明らかにできなかった。

この他の下層遺構としては，ＳＸ456・458，ＳＫ459がある。ＳＸ456は，ＳＢ450に伴う整地土によって覆われている２個の柱穴であり，ＳＢ450の造営に先行する遺構として注目されるが，その性格は部分的な調査であるため明らかでない。柱穴ＳＸ458はＳＢ450に伴うバラス敷ＳＸ452を破壊して掘ら

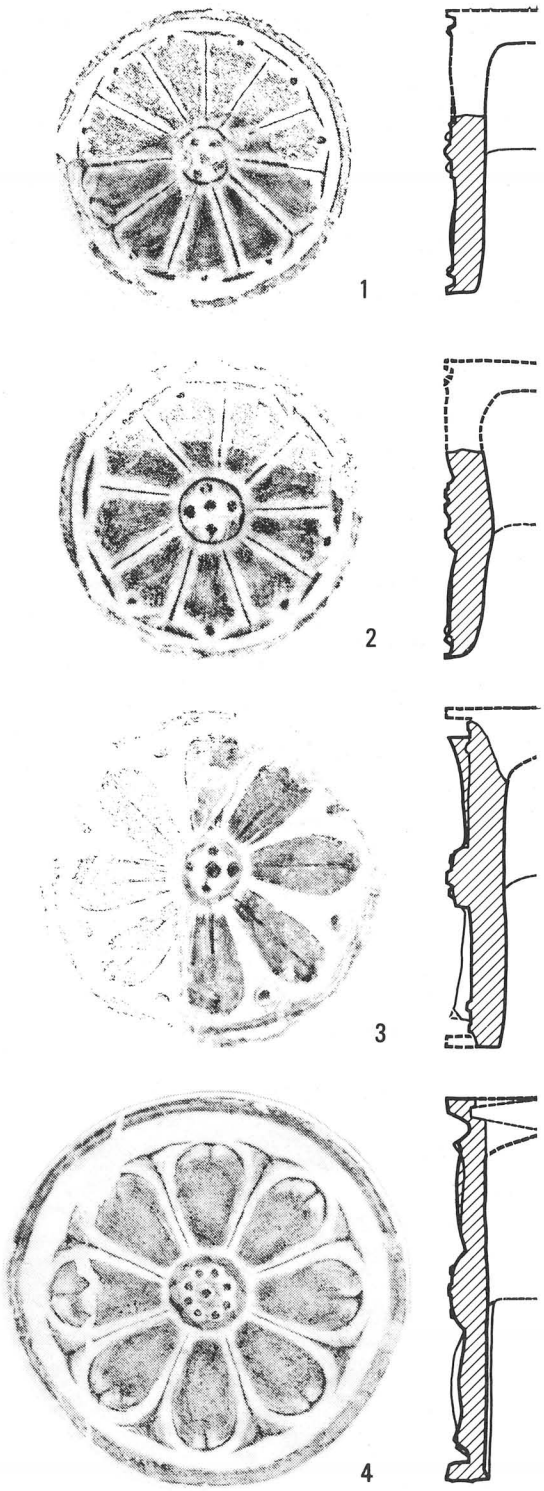
れ，ＳＢ450廃絶後の堆積層で覆われており，ＳＢ450廃絶直後の遺構と思われる。ＳＫ459は廃絶後の堆積層上面から掘られ，ＳＢ400に伴う整地層によって覆われている。埋土中にＳＢ450に伴う石列や石敷のものと思われる礫群が存在しており飛鳥Ｉ段階の土師器杯が出土した。

遺物

遺物は近世の遺構に伴う陶磁器・桟瓦片，再建仏堂ＳＢ480に伴う鎌倉時代から室町時代にかけての土器・瓦・銅製品，礎石建物ＳＢ400に伴う飛鳥時代から平安時代にかけての土器・瓦・鉄製品，下層掘立柱建物ＳＢ450に伴う土器などがある。ここでは中世以前の瓦と土器について紹介する（第29図・30図）。

瓦は軒丸瓦が多く軒平瓦は少ない。この他に多量の丸・平瓦がある。軒丸瓦の出土量はＳＢ400創建前の土坑ＳＫ440から集中して出土したものが最も多く，ＳＢ400に用いられたものがこれに次ぎ，ＳＢ480に用いられたものは９点ときわめて少ない。

軒丸瓦は７型式13種125点が出土した（第２表）。Ｉ型式は弁端を切



第29図　出土軒丸瓦（１：４）

り込む単弁軒丸瓦で，A種が1点あり，飛鳥寺Ⅰ型式と同笵と思われる。Ⅱ型式は弁端に点珠を置く単弁軒丸瓦で，A・B・C3種がある。A(1)は，中房に1＋5の蓮子を配す単弁11弁軒丸瓦で，飛鳥寺Ⅲ型式と同笵である。B(2)は，中房に1＋4の蓮子を配する単弁9弁軒丸瓦で，飛鳥寺Ⅷ型式と同笵である。Cは中房に1＋5の蓮子を配す単弁11弁軒丸瓦で，飛鳥寺Ⅵ型式と同笵と思われる。Ⅲ型式は弁端の反転をあらわすもので，A・B・C3種がある。A(4)は半球形にふくらむ中房に1＋8の蓮子を配す単弁8弁軒丸瓦で，完形に近い例が多い。Bは，単弁8弁に復原できるが，中房を欠く。Cは小片が一点出土しただけであるが，奥山久米寺出土例と同笵と思われ，半球形の中房に1＋8の蓮子を配する単弁16弁軒丸瓦に復原できる。Ⅳ型式は高句麗系と称される単弁8弁軒丸瓦で，弁中央縦に凸線や稜をあらわし，弁間に点珠あるいは楔形の間弁を配する。A・B・C・D・E・F6種7点が出土した。いずれも小片であるが，ほとんどが平吉遺跡出土例と同笵であり，AはⅠa型式と，BはⅠd型式，CはⅢa型式，D(3)はⅡb型式，EはⅢc型式と同笵と思われる。なおFは類例を欠く。Ⅴ型式は山田寺式の軒丸瓦でA種のみが出土した。これは1957年の調査でも出土している。Ⅵ型式は複弁の軒丸瓦で，小片であるため，種別を明らかにしがたいが，そのうち1点は中房に1＋8＋12の蓮子を配する複弁8弁軒丸瓦で，

	型式	点数	備考
軒丸瓦	ⅠA	1	飛鳥寺Ⅰ型式と同笵
	ⅡA	38	飛鳥寺Ⅲ型式と同笵、ＳＫ440から37点出土
	ⅡB	35	飛鳥寺Ⅷ型式と同笵、ＳＫ440から34点出土
	ⅡC	4	飛鳥寺Ⅵ型式と同笵、ＳＫ440から出土
	ⅢA	27	ＳＢ400創建時所用
	ⅢB	1	
	ⅢC	1	奥山久米寺出土例と同笵
	ⅣA	1	平吉遺跡Ⅰａ型式と同笵
	ⅣB	2	平吉遺跡Ⅰｄ型式と同笵
	ⅣC	1	平吉遺跡Ⅲａ型式と同笵
	ⅣD	1	平吉遺跡Ⅱｂ型式と同笵
	ⅣE	1	平吉遺跡Ⅲｃ型式と同笵
	ⅤA	2	山田寺式
	Ⅵ	3	複弁蓮華文軒丸瓦
	Ⅶ	6	巴文軒丸瓦
	計	125	
軒平瓦	Ⅰ	1	重弧文軒平瓦
	Ⅱ	1	川原寺751型式と同笵
	Ⅲ	1	鎌倉時代均整唐草文軒平瓦
	Ⅳ	1	室町時代均整唐草文軒平瓦
	Ⅴ	1	室町時代均整唐草文軒平瓦
	計	5	

第2表　出土軒瓦分類表

これも既往の調査で出土している。Ⅶ型式は巴文軒丸瓦で，A・Bの2種6点が出土した。

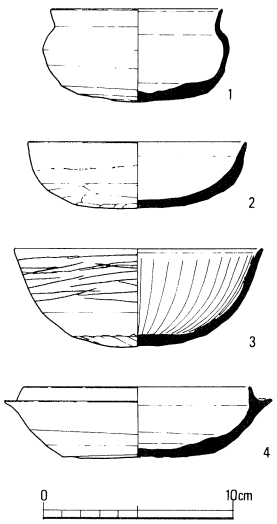
軒平瓦は5型式あり，各1点づつ出土した。Ⅰ型式は重弧文軒平瓦の小片，Ⅱ型式は平安時代前期の均整唐草文軒平瓦で，川原寺出土の751型式と同笵である。Ⅲ型式はSB480に用いられた鎌倉時代の均整唐草文軒平瓦で，火災に伴う高熱で歪んでいる。Ⅳ・Ⅴ型式はいずれも室町時代の均整唐草文軒平瓦である。

土器は古墳時代から近世に至る土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器・陶器・磁器があり，特殊なものとして緑釉を施した新羅系土器がある。

古墳時代の土器は基盤をなす黒色土層中に5～6世紀の土師器・須恵器がかなり含まれており，今回は十分調査しえなかったが，この地域が古墳時代からの居住区であった事を示すものとして注意された。

7世紀の土器としては，下層の掘立柱建物SB450廃絶後に堆積した黒褐色土層中から少量ではあるが飛鳥Ⅰ段階の土師器・須恵器が出土しており，それ以降の土器を含まない点が注目される。この他に，飛鳥Ⅰ段階の土器としては基盤の黒色土層上面から出土した須恵器杯の身(4)，SB450との関係は明らかではないが，SB400造営前の小柱穴から出土した土師器杯(2)と須恵器短頸壷(1)，SB450廃絶後の堆積層上面から掘られ，SB400に伴う整地層によって覆われるSK459から出土した土師器杯(3)がある。

飛鳥Ⅰ段階以降の土器は図示しうる適当な資料はないが，雨落溝下層の黄灰色砂質土層から飛鳥Ⅴ段階から8世紀前半にかけての土器，バラス敷から10世紀前半の土器，褐色土層から10～11世紀の土器，暗茶褐色土層から10～13世紀の土器が出土しており，それぞれの造営時期を示す資料として重要である。なお，緑釉を施した新羅系土器は，雨落溝上層及びバラス敷上面



第30図　出土土器（1：4）

から破砕した状態で出土した。

まとめ

今回検出した礎石建物ＳＢ400と下層の掘立柱建物ＳＢ450について，現状での成果と残された問題について簡単にまとめておく。

ＳＢ400の基壇は前回調査の成果と併せると，東西30m以上，南北15m以上の規模を有していることが明らかとなった。これを飛鳥時代の通有の基壇規模と比較すると，金堂とするよりは講堂にふさわしい建物と考えられる。現向原寺境内が東西約40m，南北約25mの土壇状を呈している点も，この旧基壇を利用しているためと思われる。また現境内の北は一段と低い地形となり，大規模な堂宇の存在を認めがたいこともＳＢ400を講堂に推定する有力な手懸りになるであろう。

一方，1957年の調査では，今回調査地の南接地で雨落溝を伴う二重基壇の北縁が検出されており，ＳＢ400とは雨落溝間の心心距離で約18m離れていることが明らかとなった。北で西へ20°前後振れるという建物方位もほぼ一致しており，建物の規模がわからず，また検出された軒瓦も７世紀後半までしか遡らないという難点はあるが，一応これを金堂跡に比定しうるであろう。また字金堂で検出されている塔跡と推定される建物は，建物方位をほぼ真北に揃えており，以上２つの建物とは方位を異にし，その立地する地形も前二者が位置する台地よりは１m以上も高く，必ずしも同一境内面を形成してはいないが，一応南から塔・金堂・講堂を配した伽藍配置が想定できる。寺域は現状の地形からは南北200m，東西80mの比較的狭い範囲と思われるが，その長軸線は北で西へ20°前後振れる。

ＳＢ400の造営年代については，廃絶に伴う瓦堆積層出土の軒丸瓦ⅢＡ型式の年代観から７世紀第Ⅱ四半期とみなされる。造営当初の外部施設としては基壇化粧のみが存在し，奈良時代以降に雨落溝や境内の石敷が整備され，埋没に伴い平安時代（10世紀前半）にはバラス敷が境内面を形成していたという経過も明らかになった。廃絶時期は瓦堆積層に伴う土器から12世紀頃と思われる。その後，鎌倉時代初めに規模を縮小し旧基壇の東寄りに５×４間の仏堂が再建

されるが，これも室町時代後半に焼失したことは前回調査の成果通りである。

なお，基壇築成に先行する土坑ＳＫ440から集中して出土した飛鳥寺と同笵の軒丸瓦ⅡＡ・Ｂ・Ｃ型式については，層位関係や出土状況からＳＢ400に用いられたものではなく，基壇築成に先立ち周辺に散乱していた瓦を一括投棄したものと考えられ，ＳＢ400に先行する瓦葺き建物が近くに存在していた可能性が生じる。その候補としては，通常の造営順序に従えば金堂があげられるが，その創建時に用いられた瓦であった可能性が強いことを指摘しておきたい。とすれば，下層掘立柱建物の性格とも併せ，豊浦寺の創建が飛鳥寺造営直後の７世紀初頭に遡る可能性が強くなる。またＳＫ440出土の軒丸瓦の中のⅡＢ型式に彫り加えを施した瓦が，法隆寺若草伽藍金堂の主要な瓦である点を考慮すると，飛鳥寺，豊浦寺，若草伽藍というわが国の初期寺院の造営年代を解き明す貴重な資料を提供したことになろう。

豊浦寺創建前に遡る掘立柱建物ＳＢ450は，北及び東西に丁寧な石敷をめぐらす高床式の南北棟建物であることが判明した。今回検出した建物はこれ１棟であり，その性格を論ずることは困難であるが，飛鳥地域でいくつか検出されている宮殿建物遺構との類似性を指摘することは許されよう。東側にも同時期と思われる大規模な石敷が広がっていることを確認しており，なおいくつかの建物が存在する可能性は強い。

ＳＢ450の造営年代と廃絶に至る経緯については，遺構の重複関係や，出土した土器や屋瓦の年代観からある程度年代を限定しうる。基盤をなす古墳時代遺物包含層の最上層に含まれている土器，また廃絶後の堆積層出土の土器は少量ではあるが飛鳥Ⅰ段階のものに限定できる。また，瓦を一切伴っておらず，ＳＢ450が７世紀初頭に遡る豊浦寺造営前の遺構であることはほぼ確実といえる。とすれば，当然文献に記録が残されている飛鳥地域に最初に営まれた宮殿「豊浦宮」（593～603年）との関連が問題になる。しかし，今回の調査範囲はきわめて限定され，豊浦寺創建前の遺構が存在するという端緒をつかんだにすぎず，現状ではその可能性を認めつつ，今後の調査の進展を大いに期待したい。

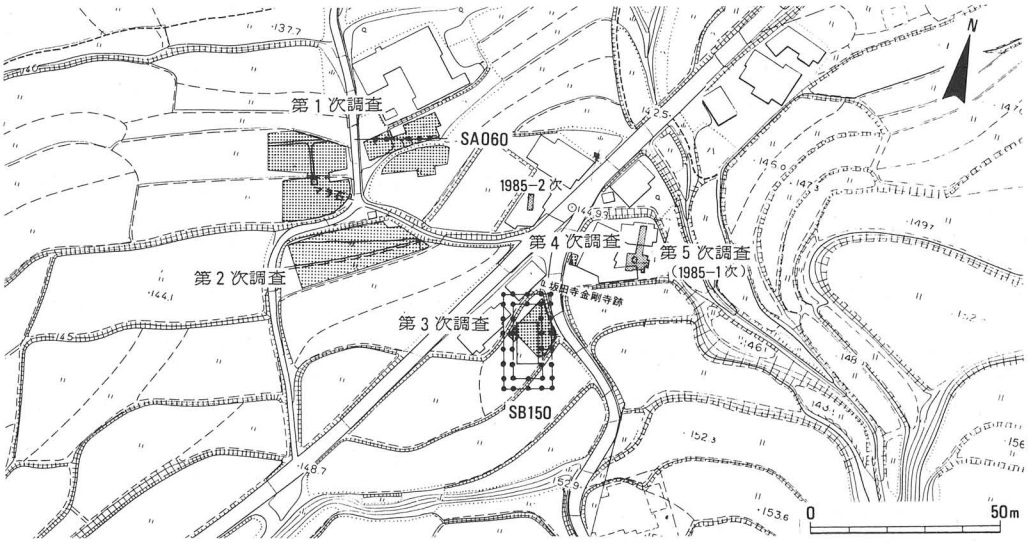
4. 坂田寺第５次調査

（1985年７月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村阪田で実施したものである。調査地は第３次調査（概報11）で検出した基壇建物ＳＢ150の北東約30ｍに位置する。また，基壇縁と思われる石組遺構ＳＸ153を検出した第４次調査地（概報13）とは同一の宅地内である。調査地の東・北方は急激な段をなして下っている。

調査は当初，東西２ｍ，南北10ｍの発掘区を設定して開始したが，鎮壇具埋納と考えられる遺構を検出したため，南半部を西へ２ｍ，東へ２ｍ拡張して行なった。

堆積土の層序は黒色土，灰色土・橙色土（中世以降の整地土），褐色土，明褐色砂質土となっている。地表下約15cmの褐色土は２層に分層でき，上層はややしまった土（褐色土１），下層は白い岩石粒子が少なく，やや柔かい土（褐色土２）であった。鎮壇具埋納の土坑は褐色土１上面で検出した。褐色土２は建物基壇の築成土と考えられるが，調査区北半では，中世以降の斜行溝によって削られており，北限を確認することはできなかった。褐色土１は厚さ９～13



第31図　坂田寺調査位置図（１：2000）

cm，褐色土２は厚さ８～22cmである。明褐色砂質土はバラス混りであり，発掘区内ではこの土層の下部は検出できなかった。非常に固くしまった土で基壇土とはいい難い。

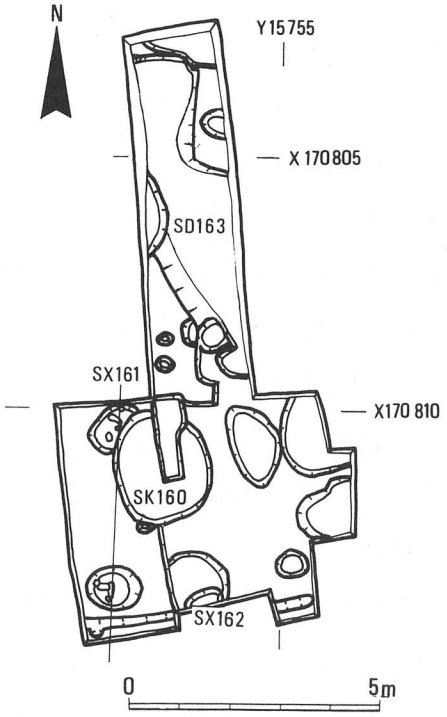
遺構

灰色土・橙色土層では柱穴８，土坑５，溝１を検出した。これらは中世以降の所産である。

褐色土１上面では，鎮壇具を埋納した土坑ＳＫ160，および柱穴ＳＸ161・ＳＸ162，褐色土１を削って作られた斜行溝ＳＤ163を検出した。

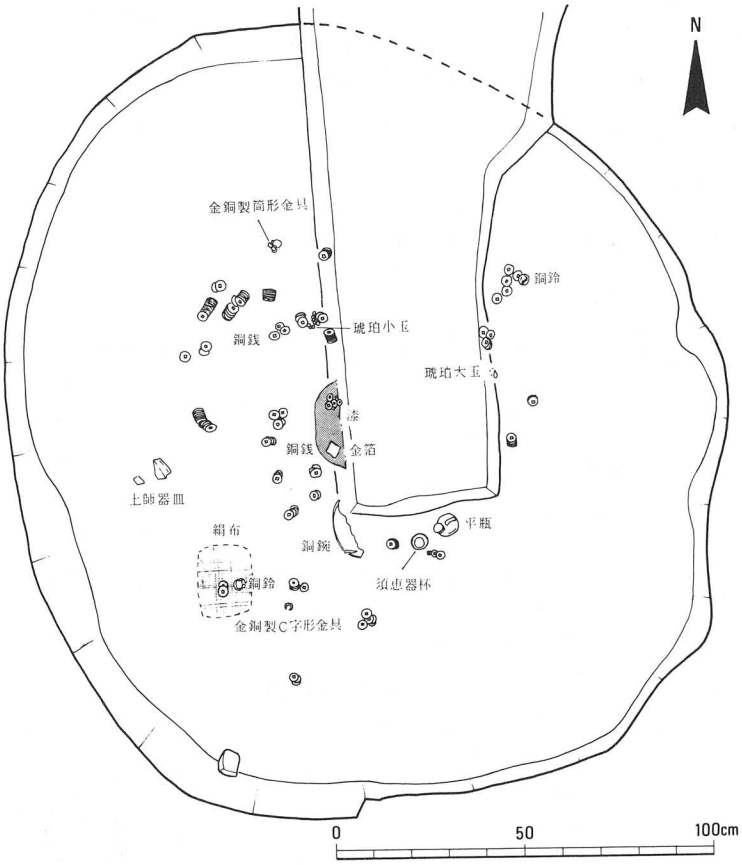
土坑ＳＫ160は南北長2.1m，東西長1.9mの不整円形を呈する深さ0.3mの浅い皿状の土坑である。北側の一部は現代の破壊を受けている。土坑内からは銅銭291枚をはじめとする遺物が多数出土した。出土遺物の内容，出土状況などから，鎮壇具と考えられる。遺物は土坑の底部近くより出土し，絹布に包まれたり，紐で一括りにされた状況を呈するものも存在しており，土坑内に投げ入れられたのではなく，一まとまりごとで置かれた状況を示している（第33図）。第３次調査の際発見された鎮壇具と比べると，埋納の掘形の有無，遺物の量，遺物の種類などの相違がある。

ＳＫ160の周辺では柱穴ＳＸ161，ＳＸ162が検出されている。ＳＸ161は掘形内に石が存在する。石は大きさ・形状ともに不揃いで，北側柱穴で６個，南側柱穴で７個みつかっている。根石もしくは栗石のようにしっかりと据えられたものではなく，底面より浮いた状態で散在している。平面形はともに楕円形を呈している。北側柱穴は東部分をＳＫ160に壊されている。長辺１m，短辺推定0.8mで深さは0.3mであ



第32図　坂田寺第５次調査遺構配置図
（１：150）

る。南側柱穴は長辺1m，短辺0.85mで深さは0.2mである。SX161の柱間寸法は3.3mであり，第3次調査SB150の身舎柱間寸法，庇の出の寸法と異なる。SX161の方向はほぼ南北方向となり，SB150の主軸方向（北で西にほぼ15°傾むく）と異なっている。



第33図　土坑SK160遺物出土状況（1：20）

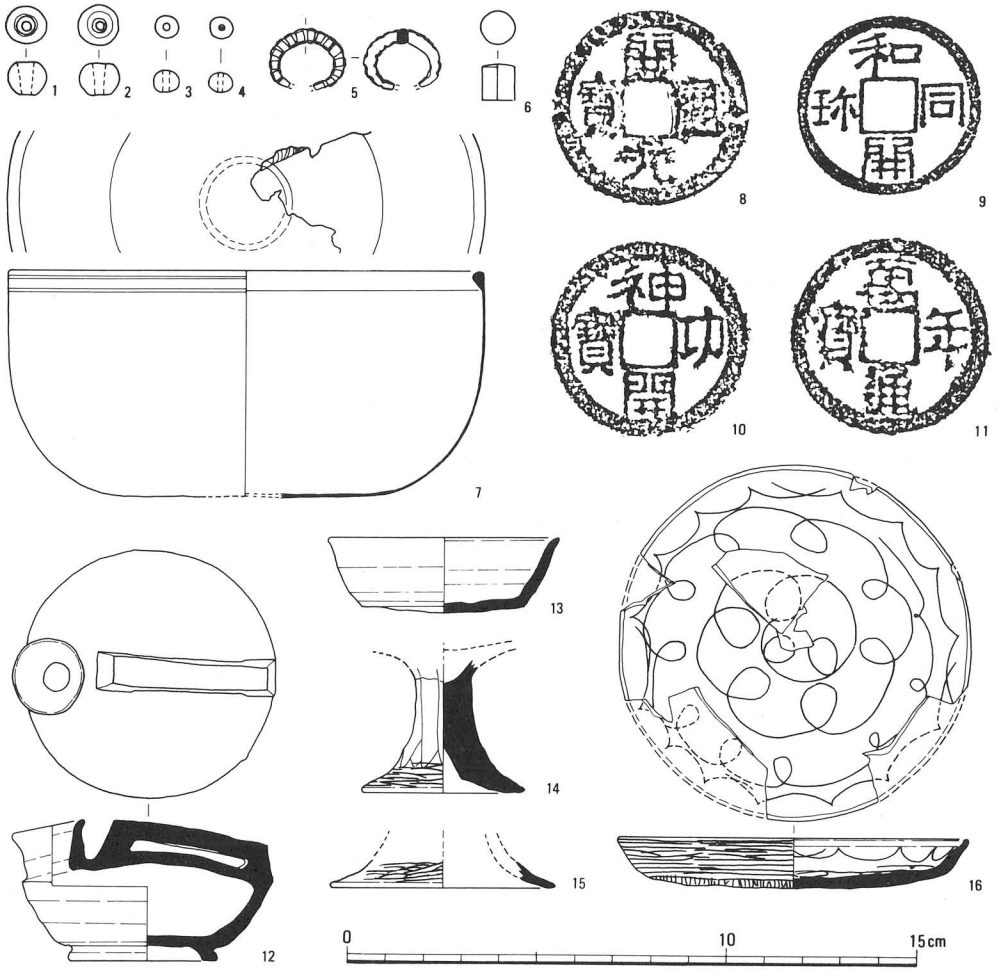
SX162は発掘区南端で一部を検出した。一辺0.7m以上の掘形をもつ。深さは0.45mを測り，掘形内に石はみられない。SX161とは異なる性格の柱穴と考えられる。

斜行溝SD163は発掘区北半部南東から北西方向に流れる。溝幅は最大部で4m，深さ0.8mで，溝内にはバラスが充塡されている。バラス中からは中世の瓦器・瓦が出土しており，上部は橙色土に覆われている。これらのことより中世以後にこの地域は大規模な削平が行なわれていることが分る。

遺物

土坑SK160から出土した遺物には，金属・土器容器類，銅銭，玉類，金属製品，布などがある（第3表・第34図）。

佐波理鋺（7）は大きい平底をもち，口縁上半部がほぼまっすぐに立ちあがる。口縁端部内面は断面三角形に肥厚する。口縁端部外面には2本で一対をな



第34図　土坑ＳＫ160出土遺物（８～11；１：１，その他は１：２）

す毛彫沈線が２条めぐる。底部内面にも２条の毛彫圏線があり，一部毛彫文様が認められる。平瓶（12），杯（13），皿（16），高杯（14・15）はいずれも小型品である。平瓶は灰釉陶器で，猿投窯の製品である。土師器皿は内面に連弧と螺旋暗文がめぐり，外面は密なヘラミガキを施す。玉類はガラス丸玉（１・２）の他，琥珀玉があり，琥珀玉には大玉と小玉（３・４）がある。銅銭は総数291点あるが，種類が判別できたものは107点である。唐銭の「開元通寶」が１点含まれるほかは第３次調査出土と同様，「和同開珎」「萬年通寶」「神功開寶」の３種がある。容器以外の金属製品のうち，筒形金具（６）は４点あり，軸端金具かと思われる。Ｃ字形の金具は全面に鍍金されている。両先端を

欠損する。銅鈴は2点あるが，保存状態が悪く図示できない。

まとめ

今回の調査では，基壇土の一部と鎮壇具を埋納した土坑ＳＫ160を検出した。これらの検出により，今回の調査区内に基壇建物が存在していたことが明らかになったが，後世の削平・調査範囲の制約などの理由により，基壇建物の規模・範囲・構造等について明らかにしえなかった。鎮壇具に含まれる銅銭からは，神功開寶より新しい銭貨がないことより，次の隆平永寶の初鋳年（延暦15年，796年）を下らない年代を与えることができ，ＳＢ150と相前後して造営された基壇建物とすることができる。今回の調査範囲では基壇縁は検出しえなかったが，第4次調査で検出した石組遺構ＳＸ153を基壇縁の一部とすると，ＳＢ150とほぼ一致する振れをもつ東西長15m以上の基壇建物を想定することが可能になる。

ＳＸ161とＳＫ160の前後関係は，ＳＸ161が古く，ＳＫ160が新しい。ＳＸ161はＳＢ150の主軸方向，およびＳＸ153の振れと一致しない点，深さも浅い点などから，ＳＫ160が掘り込まれた基壇建物の柱位置とは考え難い。鎮壇具埋納時期に先行する基壇建物の柱穴の可能性もあるが不明な点が多い。

以上のように，今回の調査は小規模ながら今後の坂田寺の調査にとって貴重な成果をあげることができた。これからの周辺地での調査が大いに期待できる。

	種　類	点数	備　考
容器	佐波理　鋺	1	口径　12.0 cm　器高　6.5 cm
	灰釉陶器　平瓶	1	底径　3.5 cm　器高　3.7 cm
	須恵器　杯	1	口径　6.0 cm　器高　2.0 cm
	土師器　皿	1	口径　9.2 cm　器高　1.3 cm
	土師器　高杯	1	脚径　4.1 cm　脚高　4.0 cm
			脚部のみ　ほかに脚部の小破片あり
玉類	琥珀大玉	2以上	
	琥珀小玉	8	直径　0.65 cm
	ガラス丸玉	50	直径　0.95 cm
銅銭	開元通寶	1	
	和同開珎	61	
	萬年通寶	15	
	神功開寶	30	
	（総計）	291	
金属製品	金銅製筒形金具	4	直径　0.9 cm　高　0.9 cm
	金銅製Ｃ字形金具	1	長径　2.0 cm　短径　1.6 cm
	銅　鈴	2	直径　2.1 cm
	金　箔	1	一辺　6.0 cm
布	絹　布		

第3表　土坑ＳＫ160出土遺物一覧表

5. 飛鳥寺の調査

（1985年12月）

この調査は，飛鳥寺西門の上を南北に通る村道の路肩改良工事に伴う事前調査である（飛鳥寺1985―２次調査，第20図参照）。従来この道路位置が，飛鳥寺の西を限る西面築地の位置に推定されてきた。調査地は西門に北接する地区で，道路の西路肩改良工事区に沿って，東西１m，南北33mの調査区を設定し飛鳥寺の西面外郭施設の検出を目的とした。なお，調査区の南端は，1956年に行なわれた西門調査区（学報Ⅴ）と一部重複している。

調査区の基本的な層序は，現路面・路床約15cm，旧路面・路床約20cm，飛鳥寺所用瓦を含む灰褐色土層10～40cm，古墳時代の土師器・須恵器を含む暗褐色土層約50cm，灰色砂混り黒褐色土となる。これらの堆積土のほかに調査区南端では，灰褐色土層と暗褐色土層との間に西門の基壇土と推定される山土を含む暗褐色土層が，厚さ18cmで南北約１mの範囲に認められた。

遺構検出は，主に暗褐色土層上面で行ない，６世紀末から７世紀代と推定される南北方向の掘立柱塀ＳＡ01，東西方向の石組溝ＳＤ02のほか，灰色砂混り黒褐色土上面で古墳時代（５～６世紀）の小ピットを検出した。

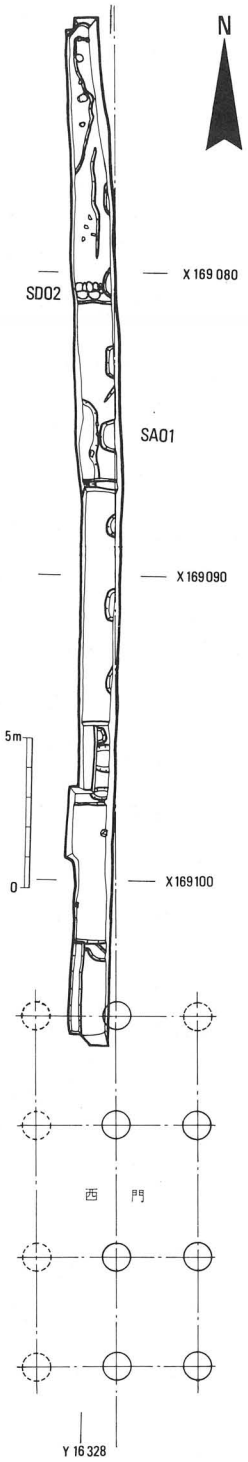
南北方向の掘立柱塀ＳＡ01は調査区中央で６間分，総長約16mを検出した。柱間寸法は2.66m等間となり，この寸法はすでに検出されている飛鳥寺北面の一本柱塀の柱間寸法と一致する（概報８）。柱掘形の大半は道路直下になるため，規模のわかるものはないが，一辺は0.9～１mと推定され，深さは0.9～１mとなる。柱掘形は版築状に埋め戻され，埋土からは少量の瓦が出土した。この南北塀の心と飛鳥寺西門を３間×２間の門とした場合の門の中軸線とはほぼ一致する。柱掘形の規模や位置また，調査区内に築地の築土が全く認められないことを考慮すると，西面の外郭施設は従来推定されていたように築地ではなく，むしろ一本柱塀であったと考えられる。そうした場合，ＳＡ01の南端柱穴から，西門北端の礎石抜取り位置までは約11.2mあり，塀の柱間寸法を2.66mとすると，その間に少なくとも３つの柱穴が必要となるが，その位置が道

路下にあたるため，今回は検出していない。

東西石組溝ＳＤ02は調査区北寄りにある。玉石が使用され，一段に並べた南側石２石と底石４石（東西0.7m）を検出した。北側石は抜取られているが，その痕跡から規模を復原すると内法幅約0.3m，現在の深さは0.2m前後である。遺構面が削平されているために本来の側石の高さは不明であるが，少なくとも２段以上あったものと推定される。石組溝ＳＤ02は南北塀ＳＡ01の柱掘形によって壊されており，南北塀に先行するものであるが，その時期や性格については明らかでない。

古墳時代の遺構は主に調査区北半にある。いずれも径60cm前後の不整円形のピットで，埋土からは５～６世紀の土器が出土した。

これまでに検出された飛鳥寺の外郭施設のうち，北面と東面施設は創建時から一本柱塀であることがすでに明らかにされている（概報８・13）。南面の外郭施設としては，1956・1979年に行なわれた発掘調査において築地痕跡を検出しているが，それを創建当初の施設とするには問題が残る（学報Ｖ，概報10）。今回西面の外郭施設が一本柱塀であることが判明したことによって，飛鳥寺の外郭施設は少なくとも東・西・北の三面が一本柱塀であることが判明したといえる。この点を考慮すると，創建時の南面外郭施設も一本柱塀であった可能性は高いように思われる。以上のように我が国最古の寺院である飛鳥寺の外郭施設は築地ではなく本来，一本柱塀であったとすれば，古代寺院の外郭施設の構造・変遷を理解するうえで貴重な手懸りを得たことになる。



第35図　飛鳥寺1985－２次調査遺構配置図（１：250）

6. 飛鳥地域その他の調査概要

a．石神遺跡周辺の調査

（1985年 9 月）

この調査は飛鳥保育園新築に伴う事前調査として，明日香村飛鳥で行なったものである。調査地は飛鳥座神社の鎮座する丘陵の北東にある，東から北西に延びる丘陵の西端である。調査は東西方向（２×12m），南北方向（３×19m）の２つの発掘区を設定して実施した。

検出遺構は土坑・集石遺構と南側の沼状の落込みである。集石遺構は東西1.5m，南北３mの範囲にわたって拳大の石を乱雑に置いてあるだけで，特に石を敷詰めたという状況ではない。落込みは南北発掘区の南側および東西発掘区に拡がっているもので，南に急傾斜で下がっており，旧耕土下２mほど掘り下げたが底まで至らなかった。埋土からは７世紀後半の遺物が出土している。今回の調査において顕著な遺構は検出できなかったが，地山が南西に向って大きく傾斜していることが明らかとなり，旧地形を知る手懸りを得た。

b．飛鳥寺寺域北部の調査（飛鳥寺1985－１次）

（1985年 8 月）

この調査は，住宅の石垣工事に伴う事前調査として，明日香村飛鳥で行なったものである。調査地は飛鳥寺寺域北部で，講堂の北西約40mの地点である。調査は東西1.2m，南北２mの発掘区を設けて実施した。地表下約1.4mで黄色砂質土の地山となるが，それまでの堆積土には近・現代の遺物を含んでいる。地山面での検出遺構は，斜行する幅約45cmの溝１条のみである。埋土からは畿内第Ⅰ様式の弥生土器や，７世紀の土師器などが出土した。

c．奥山久米寺寺域南部の調査（奥山久米寺1984－１次）

（1985年 3 月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村奥山で実施したものである。調査地は奥山久米寺寺域南部で，塔跡の南西約90mの地点にあたり，百貫川の大きな屈曲部のすぐ東側である。調査は東西8.5m，南北1.7mの南区と，その北東に東西3m，南北1.7mの北区を設けて行なった。南区の堆積土の状況は盛土・水田耕土・床土・灰褐色土で，地表下約50cmで黄褐色砂質土の地山となる。地山面で検出した遺構は，14世紀頃までの遺物を含む東西方向の小溝3条，古墳時代の幅3mの斜行溝，土坑などであるが，奥山久米寺に直接関連する遺構は明らかではない。また，北区では小範囲の調査のため明確な遺構はなく，地表下約1mで地山面を確認した。

d．奥山久米寺寺域中心部の調査（奥山久米寺1985－1次）

（1985年4月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村奥山で行なったものである。調査地は奥山久米寺塔跡の東約20mで，伽藍中心部にあたる。調査は東西2.5m，南北5.8mの発掘区を設けて実施した。堆積土の状況は，約40cmの盛土の下が淡黒褐色土，茶褐色土で，表土下70～80cmで青灰色粘質土の地山となる。地山面は北に向って傾斜している。地山面で小穴，浅い溝などを検出したが，時期など不明であり，奥山久米寺の明確な遺構は検出できなかった。

e．坂田寺寺域内の調査（坂田寺1985－2次）

（1985年12月）

この調査は納屋改築に伴って，明日香村阪田で行なったものである。調査地は坂田寺第3次調査で検出した建物SB150の北約20mである（第31図参照）。調査は東西1.5m，南北3.7mの発掘区を設けて行なった。堆積土は盛土，水田耕土，床土下が淡褐色砂礫層となり，遺構はその下，地表下約60cmで瓦を多く含む土坑を検出した。出土遺物からこの土坑は奈良時代後半に属すると考えられるが，今回の調査は小範囲のため，土坑のごく一部を検出したにとどまり，全貌は明らかではない。